
アルカディア・オンライン

九十九閃李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルカディア・オンライン

【Nコード】

N5748Q

【作者名】

九十九閃李

【あらすじ】

こんにちは！アルカディア・オンライン運営チームです。この度は来る1月1日に正式サービスが開始されるアルカディア・オンラインのβ版テスターにご応募頂き、ありがとうございます！抽選の結果、お客さまのご登録されているアカウントが見事当選されたのでご連絡させて頂きました。下記URLよりクライアントのダウンロードが可能となっておりますのでご利用下さい。 . . .

. . . このメールが届いた時、ボクの現実^{ゲンソウ}は終わりを告げ、そして新しい幻想^{ゲンジツ}が始まった。別タイトル：妄想と中二が交わる時力オス

なストーリーが始まる！

プロローグ（前書き）

この小説はArcadia Onlineという架空のMMOモドキを元に作られています。現実には存在しませんのでお気をつけ下さい。

また、この小説には中二病的表現が多分に含まれていますのでお気をつけ下さい。

なお、本作品はMMOということで他のアニメのキャラを模した登場人物なども出てきますのでお気をつけ下さい。

それではどうぞ

・ ・ ・ ・ ・

ボクのPCにこんなメールが送信されていた。

「あるかでいあ……おんらいん？」

初めて聞くタイトルに思わず困惑してしまったのはしょうがないと思う。

なにせこれでも有名無名問わずいろんなMMOをプレイしたことがあるボクだけれど、こんなMMOなんて聞いたことがなかったんだから。

更に言えば、このMMOのテスターには応募した記憶すら無いし。

もしかして妹がまた勝手にボクのPCを使って応募したんだろうか？
まったく…あの妹はどういう神経をしているんだか。

自分のPCがあるっていうのに勝手にヒトのPC使って……。

まあ確かに妹のPCはボクのPCのお古だからお世辞にも高スペックとは言いがたい。

対してボクのPCはグラフィックボードやCPU、ハードディスクの拡張などいろいろこだわった作りのハイスペックPCだからMMOをプレイする分にはとても快適。

だからなのか過去にも今回と同じような事件が数回あった。

別にMMOなんてプレイ出来ればいいじゃない。

なんて考えの方もいるかと思うけれど、残念ながらボクの妹はそういうところに拘るリアル廃人だったりする。

ボクもある程度MMOは嗜んでいるけれどもあの妹まではいつてないと思う。

とはいえもしこれが妹の応募したものだとしたらそれはそれで問題だ。

なにせ妹は後数ヶ月で受験を迎える身。

それまではPCの類に触れられぬよう隔離された所謂”勉強部屋”と呼ばれる部屋に軽く軟禁されているのだ。

そんな妹にもし新しいMMOのβ版テスターが当選した、と伝えたらどうなるだろうか？

——結果は言わずもがなである。合掌。

「ふふっ…残念だったね、妹よ。君の無念はボクが晴らしてあげる」

どうせβ版テスターなんて数日しかやらないんだからあの妹が今の状況でプレイ出来るとも思えない。

妹には落選したということを伝え、ボクはその新型MMOというも

のを楽しませて貰おう。

外道畜生と罵られるかもしれないけれど……タイミングが合わなかったのだからしょうがない。

うん、これはしょうがないことなんだ。

……………そう思うことにしておいた。

「そういえば、ここの運営会社ってどこなんだろう？」

そう思いながらマウスをスクロールさせていく。

けれどどこまで行ってもそこにはこのアルカディア・オンラインの設定がちらちらと書き連ねられているだけで運営会社の記載が無かった。

普通はヘッダーかフッターに運営会社が記載されているはずなんだから……。

まあ、時々バグっちゃうメルマガもあるし、これもその1つかな。

なんて軽い気持ちでボクはそのオンラインゲーム、アルカディア・オンラインの設定を流し読みしていた。

ちょうど今までやっていたMMOが飽きてきて新しいゲームを探していた時だったため、ボクは何の疑問も、違和感も抱かずにそのアルカディア・オンラインというものを始める気だった。

「体験型MMORPG……？」

ふと読んでいると所々で出てくるこの”体験型”という文字。

どういうことだろう？ と疑問を抱きつつもメールに貼付されてい

スクリーンショット

たSSを見てみるとそれはまるで実写のように秀麗な景観だった。

このリアルすぎる描写がウリの最近良くあるビジュアルメインなMMOなのかもしれない。

けれどボクはそれよりもそのゲームの目的に少し憧れを抱いた。

■アルカディア・オンラインとは？

プレイヤーは10以上の種族から自分の種族を決め、6つの国もしくは地域に所属し、世界を統一するのが目標です。

勿論自分の所属する国を裏切ることも可能です。頑張って世界を統一して下さい！

きつと大規模なギルド戦でもやるんだろう。

正直PVP（プレイヤー バース プレイヤー）はあまり好きじゃないボクだけど、天下を統一するなんて昔よくあった戦国を統一するようなゲームのようで浪漫があつていい。

まあどうせβ版のテスターってことみたいだし……やってみようかな。

そんな軽い気持ちで、ボクはクライアントをダウンロード、インストールしゲームを起動させた。

爽やかな音楽と共に簡易的なタイトルが表示される。

その後続けてどこかで聞いたことがあるような声優さんの声をナレーションにキャラクター作成へ入る。

「くようこそ！アルカディア・オンラインへ！このゲームでは最初に所属する6つの国、地域が選べます！次の選択にもなりますが、場所によっては選択出来ない種族もありますので気をつけてください！」

「まず所属する国を選択、か」

選択出来る国は全部で6つ。

1つは竜達が王となり国を纏めているエル・ドラド王国

1つは獣人や亜人などの少数民族が纏まって作った連邦国家力ナン

1つは精霊や妖精たちが暮らす独立国家アヴァロン

1つは背中に白い羽を持った所謂天使と呼ばれる者たちが作った天空国家ヴァルハラ

1つは悪魔や魔獣と呼ばれるはぐれものたちが争いあう唯一国ではなく地域のアルハザード

最後の1つが最も広大で最も繁殖率の高い人間達が治める連合国家

アトランティス

「うーん……せっかくだから響きが気に入ったアルハザードにしよう」

アルハザードは悪魔や魔獣だけじゃなく、いろんな種族から追放された人たちが集う地域らしいからいろんな種族が選び放題ってわけですよ！

別に悪魔とか闇とかそんな中二的なものもいいとかそんなんじゃないよ？ ホントだよ？

「＜次に種族を選択してください！なお、先ほども説明しましたが、所属する場所によっては選択出来ない種族もありますのでお気を付け下さい！

「種族……種族ねえ」

確かにアルハザードは軽く10を超える種族が選択出来た。

しかも芸が細かいことに天使を選んだ場合は堕天使に、エルフを選んだ場合はダークエルフに、と元の天使やエルフとは異なるグラフィックが用意されている。

そんな中からボクが選んだのはデフォルトで登録されていた黒い羽と赤いゴスロリ風ドレスを纏った吸血鬼。

別に悪魔とか闇とか（ry

性別や容姿も自由に決められるみたいで作っていると、ふとどこか

らか金髪ロリ幼女を作れと電波を受信した。

それなんてエターナル・フォース・ブリザード？　もしくは妹さまですか？　と思いつつ製作に掛かる。

こういう時はノリなんだよ、きつと。

「つと名前まで同じのにするとちよつとあれだから……よし、アイズ・サヴェンツィット。次はキャラクターのステータスとアビリティ、かあ」

このゲームの面白い所はこのキャラクターメイキングだと開始数分で思ってしまった。

例えば種族だつて10以上の種族から選べたし、容姿も自由に決められた。

そして何よりも自由度の高いのがこのステータスとアビリティの割り振りだと思う。

このアルカディア・オンラインでは各プレイヤーが予め50のポイント所持した状態から始まる。

そしてその50のポイントをステータスポイントに変換するかアビリティポイントに変換するか、で最初の分岐が出来る。

ステータスポイントに変換する場合1ポイントで1ステータスポイントになる。

アビリティポイントに変換する場合2ポイントで1アビリティポイントになる。

つまりアビリティを全て削って50ステータスポイントにすることも出来れば、ステータスを削って25アビリティポイントにするこ

とも出来るってわけ。
もちろんボクの選択は――

「すべてアビリティポイントに変換で」

ステータスなんてレベルさえ上がれば勝手に上がるけどアビリティは覚えるのにクエストが必要かもしれないし、ボクそという面倒なこと嫌いだからねー。

強力なアビリティさえ覚えちゃえばレベル上げなんて簡単ですよ？

「＜一度ポイントを変換すると戻すことは出来ませんがよろしいですか？

「かまいませんっ」と

「＜アビリティポイント25獲得。どのアビリティを習得しますか？

「どのアビリティ…って多いよ！これ！」

そこにはもう目が痛くなるような数十個のアビリティのチェックマークががががががが…

その中でボクの目を引いたのはアビリティとは別のタグになってい

た上級アビリティというもの。

「上級アビリティってことは通常のアビリティより強力ってことだよね。でもその代わり1つ覚えるのにアビリティポイント3使用に加えバッドアビリティ1つ習得、か」

バッドアビリティはランダムで選出されるらしく1つ覚えるのにアビリティポイントが2必要、か。

となると上級アビリティを覚える場合、まず上級アビリティで3、そしてバッドアビリティで2だから最低でも5使っってことかぁ。更に普通のアビリティは成長して強くなるけどこの上級アビリティは成長しないアビリティらしいし……

「正直バッドアビリティってどんなものになるか気になるけど記載されていないからなあ……でもこの上級アビリティって名前しか解んないけどチート級だと思うんだ」

例えば上級アビリティにあったのは蘇生能力。

これってつまりダメージを受けても自動的に回復するってヤツなんでしょ？

回復アイテム要らずになるかもしれない。

他にも超直感とか罪と罰とかいう名前だけじゃどんなアビリティになるのかわからないようなアビリティもある。

「せめて説明書きがあればねえ……まあβ版だからまだテキストが

用意されていないとか、そういう落ちなのかもしれないけど」

結局ボクは普通のアビリティを1つも覚えず、上級アビリティのみ5つ覚えるという明らかにネタ臭しかしないようなキャラを作った。

「名前がアイズ・サヴェンツィで見た目は金髪ゴスロリ少女。種族は吸血鬼で初期ステータスは全て1。覚えたアビリティは全て上級で禁術習得、吸収能力、蘇生能力、魔力生成、吸血能力の5つと」

上級アビリティはちょっと中二臭がするような選択になったけどこれバッドアビリティが5つ付くってことだね……」。

チート級な上級アビリティの対になるアビリティなんだからどれだけマイナスなんだろう……」。

ま、始めてみれば解るかぁー。

「それじゃ、スタートつと」

「くそれではゲームを開始します。アルカディアの世界へようこそ！アイズ・サヴェンツィさま」

「え………？」

突然機械的な音声から肉質のある、まるで耳元で囁かれているかのような声にふと振り返った。そこには確かに誰かが居た。

部屋の鍵もかけてある、ここは間違いない自分の部屋なのに。咄嗟に誰かを呼ぼうとして——ボクの意識は暗転した。

思いだしてみれば、それがボクのこの世界『アルカディア』へ来る
ことになった原因だった。

果たしてボクは、このゲームをクリアすることが出来るんだろうか？

プロローグ（後書き）

番外編

妹「PCが……PCが私を呼んでいる……」ハアハア

母「アンタは何言ってるの。もうすぐ受験なんだからパソコンなんて触ってる暇ないでしょう」

妹「ムー」

母「何？その顔は」

妹「5分」

母「ダメ」

妹「じゃあ10分」

母「なんで増えてるのよ。ダメったらダメ」

妹「8分」

母「ダメだっていってるでしょ」

妹「6分30秒」

母「ほら、そんな下らないこと言っていないで勉強しなさい。お母さんがみていてあげるから」

妹「グス

第1話 幻想（ゲンジツ）は時に非常である

「ん……？ 知らない天井？ っていうか息苦しい？！ 暗ッていうかここどこ？！ 痛っ！！ おでこ打ったあ」

ふつと意識を取り戻したボクは薄暗く狭いどこかで寝転んでいた。勢いよく頭を上げると硬い何かに額を打ちつけ悶絶すること数十秒。どうやら自分は今箱か何かの中にいるらしい、と理解するのにさらに数秒。

そして自分の身体の大きさが小学生クラスのものになっていることに驚愕すること数分間。

額の痛みが治まった後ボクは改めて現状を開くために漆黒の壁を両手で押し上げると、そこに広がっていたのはどこか大きな……まるでお城のような金や銀などで豪勢に装飾が施された高級感溢れる一室だった。

中々センスのいい絵画が飾ってあったりどこかの美術館でみたことがあるような石像が置かれていたり……

「こんな綺麗な部屋……なのになんで棺桶？」

空けてから気付いたものの、自分は棺桶の中で眠っていたらしいことが判明した。

いや、吸血鬼だから棺桶っていうのはあまりにもスタンダードすぎてちょっと……

「落ち着け…落ち着いて考えるんだ。ひとまず……なんでこんなところにいるんだろう?」

叫んでから数分後ようやく落ち着いたボクがしたことは何故こうなつたかを考えることだった。

幸いにも気を失う前までの記憶は残ってる。焦らずゆっくり、1つ1つ思い出していこう。

確か、自分のPCにオンラインゲームのβ版テスター当選メールが届いて…

何となく面白そうだったからそのままゲームを始めることにして…

金髪ロングのロリ幼女吸血鬼を作成して…

ステータスやアビリティの設定をして…

知らない誰かの声が

「そう!声だよ声!誰かがボクの側に居たんだ!アイツがボクをここに連れてきたに違いないんだよ!」

薄らとしか見えなかったけれどまるで影のような黒い何かがボクの側に居たんだ。

きっとそいつがボクを誘拐したに違いない!

掠れた笑い声は次第に大きくなりこの静かなる屋敷を延々とこだましていく。

それがあまりにも静で、ボクは笑いを止めることが出来なかった。

「なんだ、なんだよ、なんですか?! この素敵に愉快的イベントはツ!!!! 体験型MMO? ゲームの世界? ふざけるな!!! ボクを帰せ! いますぐ帰せ!!!!」

いくら泣き叫んでも意味が無い。

直感的にそう思ったけれど、それでもボクはそれを止めることなんて出来なかった。

「うつく……」

どれくらい泣き叫んだらうか。

見れば真紅の月が照らす夜空は今もう薄らと光を取り戻しつつあ

る。

しかしその明かりに照らされる大地は決して自分が知るような大地ではなく、ボクの精神をガリガリと削り続ける。

ボクは……どうして、どうすれば……

「落ち着きましたでしょうか？」

「ッ?!」

突然背後から自分ではない、つまり他人の声が聞こえた。

慌てて振り向くとそこには今の自分よりも2、30cmは高い赤い髪の女性が立っていた。

一体いつから？ どうしてここに？

様々な疑問が次から次へと沸き起こりまるで金魚のように口をパクパクさせるボクを見て、その女性はとても柔らかな笑みを浮かべた。

「誕生おめでとうございます。アイズ・サヴェンツイ様」

「……たん、じょう……？」

はい、と首を立てに振る女性にボクはどこか居心地の悪さを覚えた。意味が解らない。理解出来ない。一体どういうことなのか。

けれど目の前のこの女性に聞けば答えてくれるのだろうか？

正直そこまで信頼していいものなのかも解らない。

このヒトは信頼してもいいヒトなんだろうか？ こちらの名前を知っていたということはやはり何かしらの関係者であることは間違いないはず。

しかしこのヒトの持つ情報が正しいものなのかも解らないし、第一

こんな不可解で理不尽で理解不能で意味不明な状況のボクに正直に
全てを話すなんてありえるだろうか？

「……………」

否。

ボクはキツとその女性を睨みつけながら現状の打開を思案すること
にした。

だというのに…だというのにこの女性は一――

「アイズ様が不可解に思われていることも存じております。そのこ
ともお話したいと思いますので、ご案内いたしますから私の後につ
いてきて頂けませんでしょうか？」

「イヤ。ここで話して」

罨かもしれない。

こんな状況で誰が他人を信じられるだろうか？

第一そこで話をしようがここで話をしようが何も変わったことはな
いはず。

「……………」ですがもうじき日が昇ります。生まれたばかりのアイズ様で
は日の光を浴びてしまうと……………」

「っ……………」

そ…そうだった。今のボクは吸血鬼なんだ。
そして今居る場所はこの大きな屋敷の廊下で、そして大きな窓からはもうじき直射日光が入るわけで…

「せめて、日の当たらないお部屋にご案内致しますので、どうかついてきては下さいませんかでしょうか」

結局ボクはしぶしぶながらも頷くしかなかった。
いつだって現実是非常である。

「……………解った」
「ではこちらへどうぞ」

ホッとした笑みを浮かべる女性に何故か少々罪悪感を感じたものの、決して警戒は怠らずボクは彼女の後に続く。

こうしてボクはそこでこの世界の現実と向き合うことになる。

第1話 幻想(ゲンジツ)は時に非常である(後書き)

番外編

妹「ねえお母さん」モジモジ

母「何？」

妹「ちよつとトイレに行つてきたいんだけど」モジモジ

母「そう。じゃあ行つてきなさい」

妹「k t k r

母「でもその抱えているノートパソコンはここに置いていきなさいよ?」

妹「(´・ω・´) ショボーン

母「1分で戻つてこれなかったら……解つてるわね?」

妹「」。・。(ノム)・。ウエエエエ

第2話 まだ見ぬ恐怖と視えた恐怖（前書き）

短くてすいませんorz

執筆中にインフルエンザに掛かり死んでました。

次こそは早めに投稿：出来たらいいなあ。

第2話 まだ見ぬ恐怖と視えた恐怖

「ではこちらへどうぞ」

そう言われて赤い髪の女性に連れてこられた場所は側に暖かそうな暖炉や柔らかそうなソファーもある憩いの場という感じの場所だった。

まあ憩いの場、というには少し大きすぎる部屋のような気もするけれど。

だって見た感じ軽く40畳はありそうだし。

ここだったら簡易的なパーティーだって開けそうですよ？

少し照明が少ないことを除けばだけど。それはともかく 閑話休題――

「さて…何からご説明いたほうがよろしいのでしょうか」

「まず君は誰？そしてここはドコ？」

そんな小さな呟きにもボクは過敏に反応してしまった。

目の前の女性もまさか聞かれていたとは思っていなかったらしく目を丸くしていた。

人の呟きに聞き耳立てる、なんて真似は過程はどうあれ正直無粋だと思う。

でも現状のままではどうしても気が気でない。

実際目の前の女性の名前も知らないようじゃまともに会話も出来ないし、そもそも相手はボクの（といってもエディットしたキャラのだけど）名前を知っていた。

なのに自分は相手の名前すら知らない、なんてあまりにも不平等だ。圧倒的に相手の有利な状況で平等不平等もないけれど、最低でも名前ぐらい知ってないとどうにもならないしね。

応対に思うところあったのかその女性は一瞬、本当にわずかな瞬間だけ顔を強張らせたものの、軟らかい笑みを浮かべながら言葉を紡ぐ。

「わたくしの名前はサティーナ。それでも魔族の中では中堅クラスの実力はあるかと自負しております。そしてここは我が主、アイズ・サヴェンツィ様の居城にございます」

「主……？　ボクが？　君の？」

「はい。それではまず今のアイズ様の状況についてご説明致しますのでこちらにどうぞ」

そう言ってサティーナはソファの方へ誘導する。

話が長くなるからか、それともさつき言っていたようにボクの従者だからなのかはさておき、確かに立ちっぱなしで話をするというのも無粋なためボクはそのソファに腰掛けた。

身体の重みで深く沈むソファはたいそうお金がかけてあるような所謂一流ブランドの高級品としか言いような無いぐらいの逸品で、庶民出身のボクからすればこんなソファに座るだけでまた場違いな感覚に苛まれる。

サティーナはというと近くの暖炉に薪をくべると小さく何事かを呟き手から火を出していた。

その光景に自分はファンタジーな世界にいるということを再確認させられ、若干気落ちする。

そんなボクの心情のことなどまったく気にも留めていないのか、サ

ティーナはボクの対面の位置に座りなおすと再びあの軟らかい笑みを浮かべた。

ようやく説明会が開始されるらしい。

「まず初めにアイス様は魔族の中でも特に優れた種族、吸血鬼と呼ばれる魔族になります。アイス様も本能的には理解されているかと思いますが……」

「……」

確かにボクはさっき日の光を知っている知識として、というより本能で避けようと考えた。

これは吸血鬼の本能が危険と判断した結果なんじゃないだろうか？
決して促されたからそれに従った、というだけじゃない。

確かにボクは自分を吸血鬼として自覚し始めている。

そこまで考えて身の毛がよだつ感覚に襲われた。

ボクは何を考えた？

自分が吸血鬼として自覚している？

それは自分が自分ではなくなるような奇妙な感覚で、それを自覚してから身体が振るえ始めた。

誰しも自分が上書きされていたというものは恐怖を抱くことだろう。
しかしそんな時でもこれが恐怖と呼ばれる感情なのか、と冷静に判断するボクが居る。

「——大丈夫。続けて」

「はい。その吸血鬼の中でも”真祖”の血筋を受け継ぐものを純血種。受け継いで居ないものを混血種もしくは雑種と呼びます」

「ちなみにボクはどっちだかわかる？」

「もちろん存じております。アイズ様は純血種の中でもさらに濃い純血種同士から生まれる非常に濃い血筋をお持ちと窺っております」

純血の姫と呼んだ方がよろしいかもしれません。という声が聞こえた気がしたがボクの頭の中は望んでいたものとの差に落胆していた。

「また、吸血鬼と一括りに述べましてもその中には多種多様な力を持つもの達があります。者によっては死者の魂を自在に使う死霊使^{ネクロマン}いと呼ばれる者も居れば、逆にその魂を取り込んでその能力を行使する祈禱師^{シャーマン}と呼ばれる者もあります。吸血鬼に関しましては力の強さが血の濃さにもなりますので、アイズ様に関しましてはその強さ稀に見ぬものがありました」

とは言え、自他共に認める産まれたばかりの吸血鬼見習いであるボクにそんな力なんてあるとは思えないけど。っていうか、なんで過去系？

「……それは。わたくしが先代のアイズ様に仕えていたからでございます」

はい……？先代のボク？仙台じゃなくて先代？
っていうか今——

「もしかしくなくてもサティーナはボクの心が読めたり？」

「……読むことは可能ですが、アイズ様の心を読むなんてそんな恐れ多い真似など行えるわけがございません」

まあ、アイズ様は顔に出てくるので読む必要もありませんが、という小さな呟きをボクはしっかりと聞いた。

どうにもこの身体は五感がずば抜けて優れているようだ。

そして今更ながら感情的になりやすい気がする。

元々ボクはそれなりに落ち着いた人間だったはずなのに……。

まあこんな非日常的な状況下になれば人間狂つてもしょうがないけれどね。

「今のアイズ様は先代のアイズ様の因子を受け継ぎ転生した姿になります」

「因子を受け継ぐって一体どういうこと？」

「そうですね——解り易く言えば先代のアイズ様の血肉を元に肉体が再構成された姿、と言えはよろしいでしょうか。容姿もそっくりでございます——若干幼いですが」

「そ、それって……蘇生能力……？」

「……完全な蘇生ではなく、輪廻転生だと先代のアイズ様はおっしゃっております。そもそも濃い血筋を持つ吸血鬼の方々は生まれもって特殊な力を持つ方々が多く、先代のアイズ様もその輪廻転生を含め不思議な力をお持ちになっておりました」

「先代のボクってというのはどんな能力を持っていたの？変身とか？」

不思議な力……吸血鬼としての力のことだというなら、ボクにはさっぱりわからないけれど。

例えば吸血鬼と言えば蝙蝠や狼に変身出来たり、吸血することで相手を従者にしたり、とかかな？

でもそれは吸血鬼としてわりかし有名な話だと思うし…

「いえ、先代のアイズ様が持つていらした能力はそんな一般的なものではないかもしれませんでした。確か未元物質ダークマターと名乗ってありましたね」

「だ、未元物質？！」

ちよつと待て、先代のボク、一体何をやっているんだ？！

未元物質？！それってもしかしくなくてもあの小説のあの能力だったりするのか？！

「あー…ちよつと聞きたいんだけどいいかな？」

「はい、なんなりと」

「あー…その未元物質ってさ、どんな能力か聞いてたりする？」

「詳しいことは教えていただけなかったのですが、能力を発動させると背中に白い羽が生えていましたね。何故かその時『私に常識は通用しねえ！』と叫んでおられましたか」

あー……うん。

多分あの小説のあの能力だ。きっとその台詞を言う時はキリッとした顔になるんだろうな。

とは言えそこで新たな疑問が出てくる。

何故先代のアイズ・サヴェンツィはそれを知っていたんだろう？都合よくこの世界にその小説があった？

いや、その可能性は限りなく低いはずだ。

それよりも考えられるのはその先代がボクと同じ現代人^{プレイヤー}だった、ということ。

それなら知っている人は知っている。

ボクもよく読んでいたしもし生まれ変わってあの世界の能力が使える、というなら是非使ってみたいと思える能力だ。

そこまで考えてボクはとある考えが頭を過ぎり目を見開いた。

一瞬にして体が震えだし、あまりの恐怖に身体を抱き締め震えるボクにサティーナも危機感を覚えたのかボクの額に手をあて何かを呟いていた。

次の瞬間、ボクの意識は深い闇の中へと沈んでいくのだった。

ああ、ボクはなんて世界に来てしまったんだろう？これが夢なら覚めてほしい――

第2話 まだ見ぬ恐怖と視えた恐怖（後書き）

番外編

妹「ねえ、お母さん」ウワメツカイ

母「何？解らないところでもあったの？」

妹「あのさ、勉強も大事だけど息抜きも大事だと思うの」「PCTカ
PCTカPCTカ

母「そうね。確かにこんな閉め切った部屋だと気も滅入るわよね」
ヨッコイショウイチ

妹「でしょ？だからさ、10分ぐらい休憩しよ」k t k r

母「部屋は空けておくから。10分後に戻ってくるのよ？」スタスタ
タヘヤノソトへ

妹「k t k r！いよっし！PCが私を待っている！！ってあれ？私の
ノートは...？」

母「（PCを持ち出しておけば問題ないでしょう）」

妹「」

母「NDK？NDK？」

妹「」。。。。（ノド、）。。。。ウエエエエ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5748q/>

アルカディア・オンライン

2011年8月28日23時45分発行